

東京都立大学 高エネルギー実験研究室



2022年8月28～30日
ゼミ合宿@那須

高エネルギー実験研究室：構成

スタッフ(2023年4月時点)

- ・教授: 角野秀一
- ・助教: 汲田哲郎
- ・連携客員教員: 足立一郎、西田昌平 ※
- ・客員教員: 住吉孝行、浜津良輔、千葉雅美
- ・客員研究員: 今野智之、岩田修一

※ 足立教授と西田准教授は KEK 所属の連携客員教員

大学院生(2023年4月時点)

- ・D: 1名
- ・M2: 3名
- ・M1: 4名

卒研生(現在): 4名

来年度大学院生募集人員: 3名～4名

- 放射線検出器、電子回路、計算機などに興味がある方
- 大規模な実験に興味がある方
- とにかく手を動かしてみるのが好きな方

高エネルギー実験研究室: 活動等

☆ 研究室の活動

- ・研究室ミーティング: 1回 / 週 (研究の進捗状況等の報告)
- ・ゼミ(4年生、M1): 1回 / 週 (相対論的量子力学、特殊相対論、統計処理、検出器)
- ・ミニマム教程: 計算機(C++)、実験、相対論
- ・合宿ゼミ(蓼科、那須、箱根、伊豆、秩父、富士、水上、他): 9月頃(セミナー、研究発表)
- ・日帰りハイキング: 11月頃、日帰りで近郊の山へ
- ・飲み会: 約1回 / 月
料理が好き、お菓子作りに興味がある方も歓迎(求む)

☆ 都立大物理(高エネ実験、原子物理、宇宙実験)研究室間のイベント

- ・合同花見: 4月
- ・ソフトボール大会: 6月頃

☆ 高エネルギー物理の大学間の活動

- ・高エネルギー物理春の学校(毎回琵琶湖畔): 5月頃
- ・flavor physics workshop (富田林、柏、三浦、新潟、沼津、浜松、他): 10月頃
- ・臘月会: 東京近郊の大学の高エネルギー物理研究室合同の BBQ

☆2022年度卒業生(卒研生:4名、修士課程2年:3名)の進路

- ・卒研生: 就職(公務員)1名、修士課程(本研究室)進学2名、修士課程(他大)1名
- ・修士課程: 企業に就職 3名

素粒子標準模型から新物理へ



「物理学70の不思議」

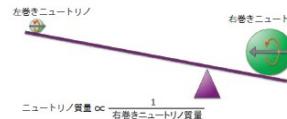
<https://www.jps.or.jp/books/gakkaishi/70wonders.php>

06 ニュートリノはなぜこんなに軽いのか？

ニュートリノは素粒子の一種である。1930年にバウリ(W. Pauli)が存在を理論的に予想してから80年以上、1956年にライネス(F. Reines)とカワーン(C. Cowan)がはじめて実験で検出してから60年が過ぎたが、いまだに素性がよくわかつていない。

質量は素粒子の基本物理量の1つであるにもかかわらず、ニュートリノではその測定にまだ成功していない。ただし、ニュートリノ振動の発見から、その値は非常に小さいものでのないことはわかっている。また宇宙の大規模構造におけるゆらぎの観測から、3種のニュートリノの質量の和は約0.23eV以下と考えられている。この質量は、ほかの素粒子に比べてあまりに軽すぎる(ニュートリノ以外で最も軽い電子の100万分の1以下)。なぜニュートリノはこんなに軽いのだろうか？

すべての素粒子にはその反粒子が存在する。ニュートリノと反ニュートリノが別の粒子だとすれば、ニュートリノの質量もほかのすべての素粒子と起源は同じ(ディラック質量)であり、ニュートリノだけが特異的に軽いのは不自然である。一方、ニュートリノと反ニュートリノが同じ粒子の場合(マヨナ粒子:39参照)、「右巻きニュートリノ」



は極めて重いマヨナ質量をもつことができ、「シーソー機構」(図)とよばれる質量固有値の反比例関係を通して、我々の世界を飛び交っているニュートリノの質量を特異的に小さくすることができます。

さらにおもしろいことに、この極めて重い右巻きマヨナニュートリノは、物質粒子への崩壊と反物質粒子への崩壊の確率が異なる可能性がある。初期宇宙における右巻きマヨナニュートリノの生成と崩壊によって、我々の住むこの宇宙の「物質優勢の謎」が説明できるかもしれない。「ニュートリノはなぜ軽い？」という問いは、この素粒子物理学最大の謎に迫る糾きなのである。

* ピッグバンによって物質と暗黒に同じ分量だけ生成されたはずの反物質は、どこに消えたのか。05参照。

DCBA 実験

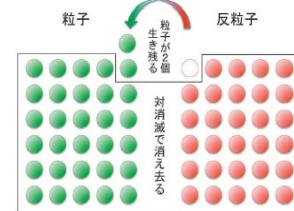
09 なぜ我々は物質だけからできているのか？

我々の世界は素粒子からできている。

素粒子には「反粒子」という、質量はまったく同じで性質がまったく逆、という相補が存在する。たとえば最も身近な素粒子である電子には、「陽電子」という反粒子が存在する。粒子と反粒子は電荷などの性質がまったく反対なので、出会うと+と-が打ち消し合って消滅し、エネルギーの塊になってしまふ。逆にエネルギーを狭い空間に集中させると、粒子と反粒子との対をつくり出すことができる。

宇宙のはじまりであるピッグバンにおいても、巨大なエネルギーの塊から粒子と反粒子が生み出された。粒子と反粒子は必ず対になってつくられるので、宇宙に粒子が創られたとき、粒子と反粒子、すなわち物質と反物質は厳密に同じ分量だけつくられた。だが現在の宇宙には、見わたすかぎり物質しかない。反物質はいったいどこに消えたのだろう？

ピッグバン以降の宇宙の進化において反物質が消えてなくなる条件は、「サハロフの3条件」として知られている。すなわち(1) パリオン数の非保存、(2) CPの非保存、(3) 熱平衡の破れの3つである。このうちパリオン数を保存しない反応があることと、宇宙の進化において熱平衡がない



状態があったことはわかっている。CP非保存の過程とは、図の矢印のように、反粒子と粒子の数のバランスを崩す過程である。この過程により粒子の数が反粒子よりわずかに多くなり、反粒子がすべて対消滅して消え去った後、わずかながら粒子が生き残ることになる。この過程があることもわかっているが、その大きさが小さすぎて現在の宇宙の物質量を説明できない。未発見の新たなCP非保存の過程を探る、燃然たる競争が広げられている。

Belle(II) 実験、T2K 実験

07 なぜ暗黒物質はいまだ見つからないのか？

近年における宇宙観測の発展の結果、我々の宇宙に通常の方法では検出にかかる物質、いわゆる暗黒物質が存在することが確定的となった。では、その本体は何であろうか？これまで確認されている素粒子や、それらが構成する物質は、暗黒物質にはなりえないことがわかっている。その正体をめぐる謎は宇宙の暗黒物質問題とよばれ、物理学における最重要問題の1つとなっている。

暗黒物質の正体については、さまざまな仮説が提案されている。有力なのは、暗黒物質は質量が陽子の100倍程度の中性で安定な新しい素粒子とする。WIMP (Weakly Interacting Massive Particle) 仮説である。この仮説は、素粒子標準模型を超える物理と深く関係する可能性を示す。また標準模型の素粒子とある程度の強さで相互作用をすることも保証する。そのため、理論と実験の両面で強く支持され、現在その検証が世界中で行われている。

WIMPの探査は図のように、高エネルギー粒子衝突で暗黒物質をくり出しある加速器探査。我々の周囲に漂う暗黒物質を地下の検出器でとらえる直接探査、銀河系や近傍銀河などにいる暗黒物質が、対消滅の際に生成する高エネルギー粒子線(反陽子やガンマ線)をとらえる間接探査の3



本柱を軸に行われている。これらの実験の検出感度は上がっているが、いまだWIMPの検出にはいたっていない。

この事実は何を意味するのだろうか？実験の感度が上がりれば、いずれ発見される可能性は十分にある。これまでの高感度探査は、特定の素粒子(クォーク、グルーオンやヒッグス粒子)との相互作用に依存する傾向があった。ほかの素粒子との相互作用に感度がある実験(電子・陽電子加速器など)の推進や、特定の相互作用によらず幅広くシグナルが期待できる間接探査の高感度化が重要となる。あるいは、暗黒物質はWIMPではない可能性もある。その場合、どのような候補があるのか、背後にどのような物理が考えられるのか、そしてどのように検証すればよいのか、新しいアイデアに基づく再考が必要となるだろう。

LHC ATLAS 実験

11 ヒッグス粒子の背後にある物理は何か？

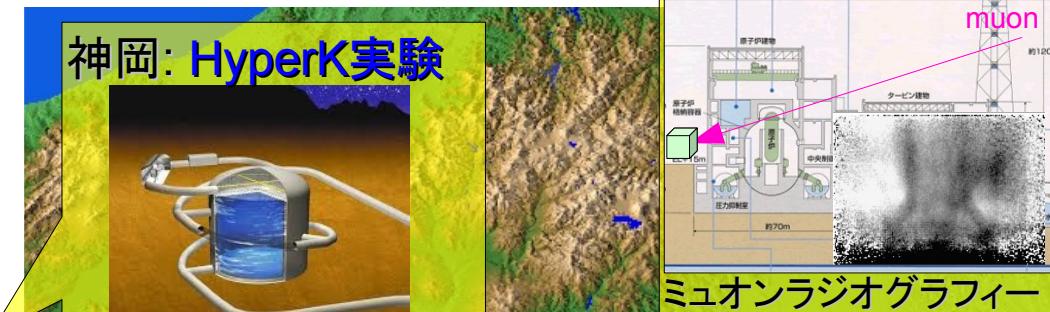
2012年のヒッグス粒子の発見は記憶に新しい。素粒子の標準模型では、物質を構成する粒子と力を伝える粒子により、我々の宇宙を記述する。力の伝わり方は理論の対称性が支配しており、たとえば電磁気力は位相変換の対称性に基づく。このような理論体系において、力を伝える粒子は質量をもたない。実際、電磁気力は遠隔力であり、力を伝える光子には質量がない。一方、自然界には短距離のみで働く弱い力があり、こちらは質量をもつ粒子が力を伝えると解釈するうまく記述される。しかし、そのような粒子は理論の予言能力を壊すことが知られていた。そこで、理学論と無矛盾な質量を実現するために導入された粒子がヒッグス粒子である。光子は超伝導物質中でもたかも質量をもつかのようにふるまうが、同様に、我々の宇宙が超伝導相に転移したため、弱い力を伝える粒子に見かけ上の質量が生じたと考えるのである。ヒッグス粒子はこの超伝移の引き金を握る。標準模型では、宇宙が超伝導相に移ることで、それまで同一の対称性で記述されていた力を伝える粒子群が、質量をもたない光子と、質量をもつ弱い力を伝える粒子に分化する。この相転移を「対称性的破れ」とよぶ。これによって、異なる2つの力が統一的に理解されたのである。



それではなぜ対称性は破れたのであろうか？標準模型の枠内では、対称性の破れの起源は明らかにされていない。そこで、「自然」に対称性が破れる新しい物理模型が盛んに議論されている。たとえば、高次補正によって常伝導相が不安定となり、自動的(力学的)に超伝導相に移る可能性が考案されている。超対称性(フェルミ子とボース粒子を入れかえる対称性)をもつ標準模型や、ゲージ・ヒッグス統合余剰次元モデル(力を伝える粒子の余剰次元成分としてヒッグス粒子が現れる)、複合ヒッグス模型(ヒッグス粒子を、より基本的な粒子からなる複合粒子と考える)などがその候補である。標準模型を超えたこれらの新物理模型は、それぞれ新粒子を予言する。したがって、今後のLHC実験やILC計画などによる新粒子の発見や、ヒッグス粒子の精密測定による新物理の検証が期待される。

Belle II 実験、ATLAS 実験

高エネルギー実験研究室: 活動の場



T2K: ニュートリノ振動実験

HyperK: ニュートリノ実験、核子崩壊実験

Belle II: 電子・陽電子衝突型加速器実験

DCBA: 二重ベータ崩壊実験

UNI: ポジトロニウム実験

ミュオンラジオグラフィー: 宇宙線を用いた原子炉・火山などの透視

LHC ATLAS: 最高エネルギー陽子・陽子衝突型加速器実験

UNIを除き、他大学・国内外研究機関との共同実験



Belle II実験

3世代のクオークの混合を表すユニタリ行列
(カビボ・小林・益川行列)

$$V = \begin{pmatrix} V_{ud} & V_{us} & V_{ub} \\ V_{cd} & V_{cs} & V_{cb} \\ V_{td} & V_{ts} & V_{tb} \end{pmatrix}$$

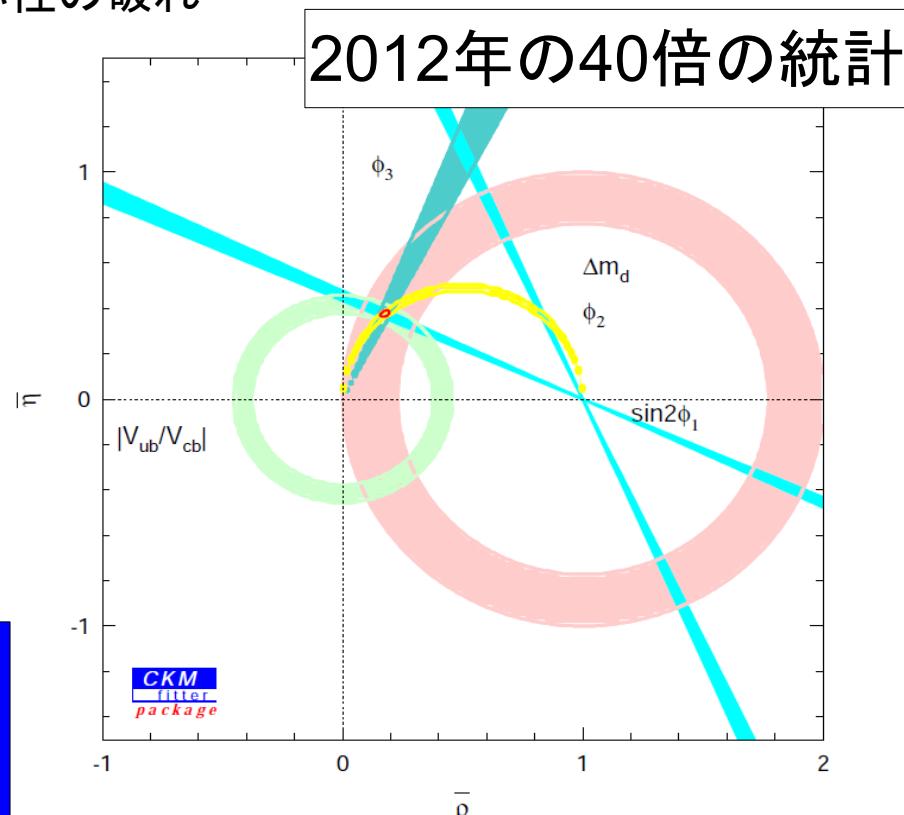
物質粒子			反物質粒子			
	第1世代	第2世代	第3世代	第1世代	第2世代	第3世代
クオーク	u d s b	c s b	t b	反u d s b	反c s b	反t b
レプトン	ν_e e 電子	ν_μ μ 負ミューイオン	ν_τ τ 負タウ	反 ν_e 反e 陽電子	反 ν_μ 反 μ 正ミューイオン	反 ν_τ 反 τ 正タウ

3x3 ユニタリ行列は一つの複素位相を持つ→CP対称性の破れ

- ユニタリティ条件($VV^*=1$)の一つを三角形として記述
- 三角形の辺の長さや角度を複数の方法で精密測定

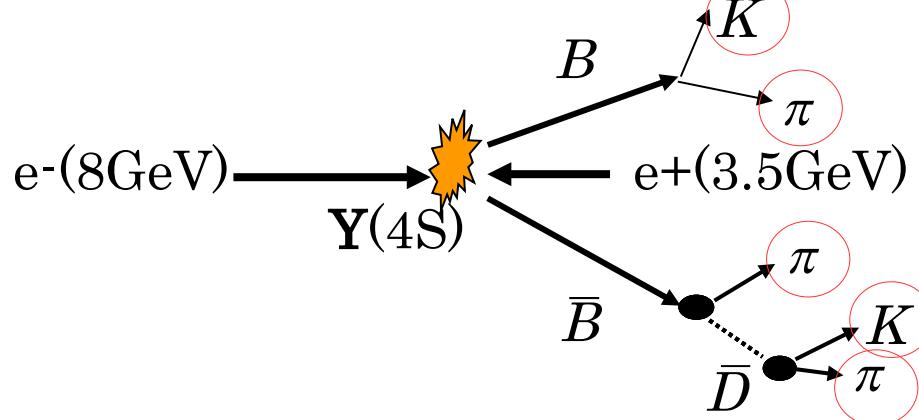
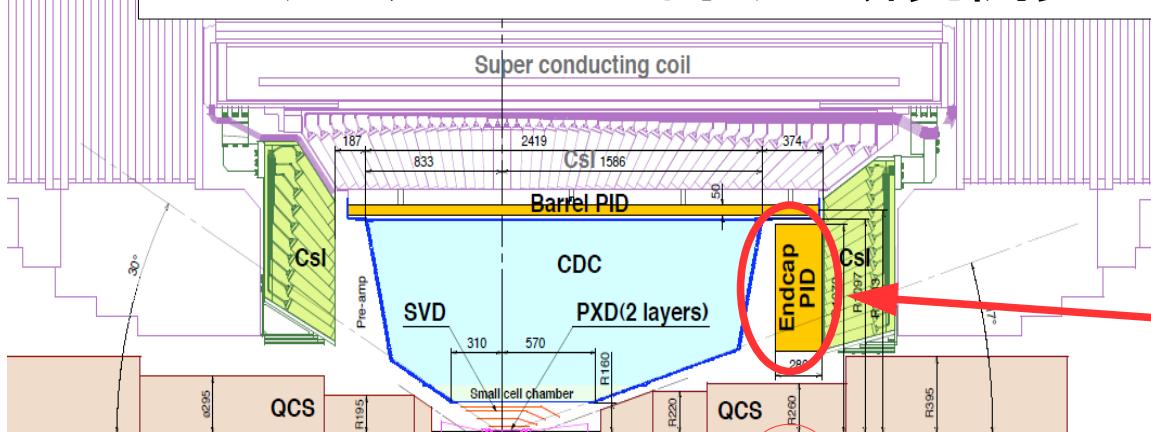
三角形が閉じているか?
閉じている→3世代クオークの混合
閉じていない→ 新物理が関与

ユニタリティ三角形の精密測定により
新しい物理を探索し、
さらにそのフレーバー構造を探る



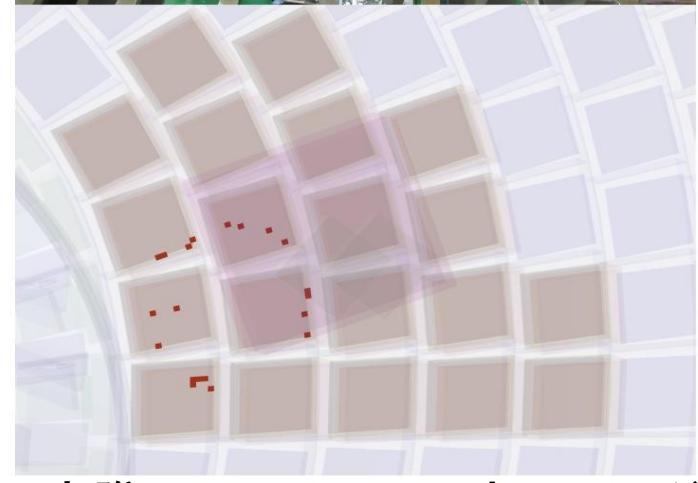
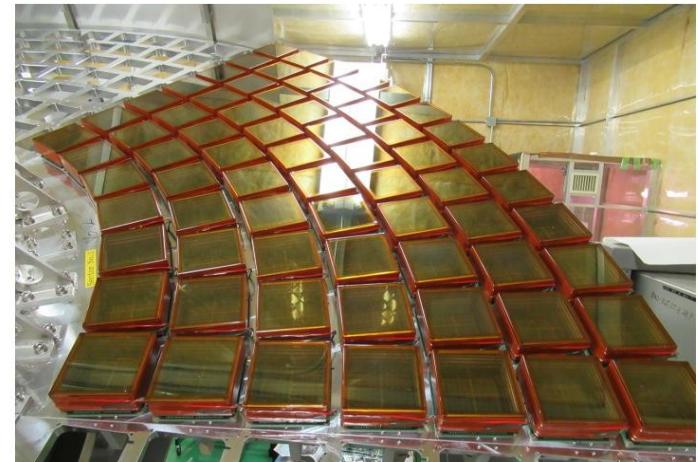
Belle II検出器の開発

都立大では、Belle II 検出器の粒子識別装置(ARICH)を担当
- Belle II 実験でのARICH 検出器の運用
- アップグレードに向けた研究開発



終状態の K, π 中間子を精度よく同定し、
 B 中間子の崩壊事象を効率的に再構成

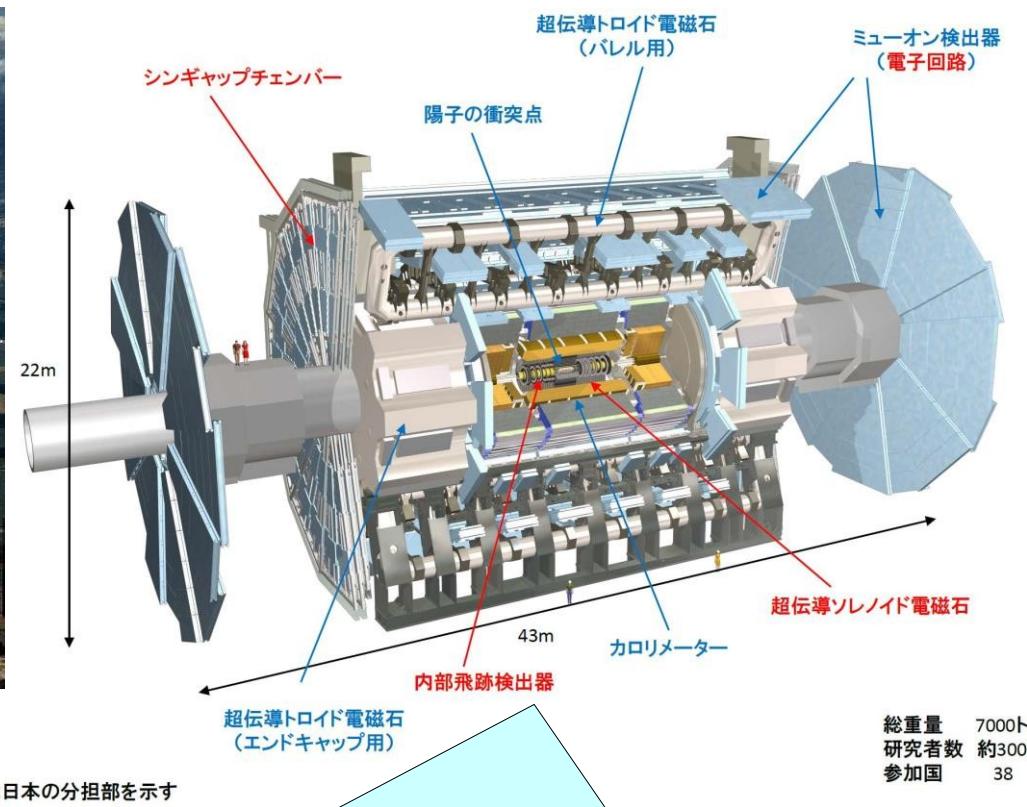
ARICH検出器(の一部)



実際のチエレンコフ光のリング

LHC ATLAS 実験

- ・世界最高エネルギーの衝突型加速器実験
(エネルギー・フロンティアの実験)
- ・「TeV 領域」で標準模型を超える新しい物理を探索



都立大では内部飛跡検出器のアップグレードに参加

LHC ATLAS 実験の研究内容

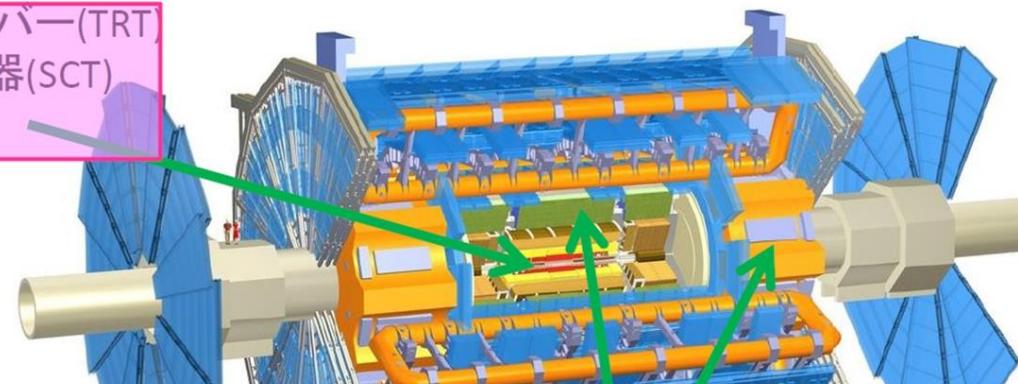
都立大では、新しいピクセル検出器の組み立てに関する研究開発に参加

内部飛跡検出器

ストローチューフェンバー(TRT)
シリコンストリップ検出器(SCT)
ピクセル検出器(Pixel)

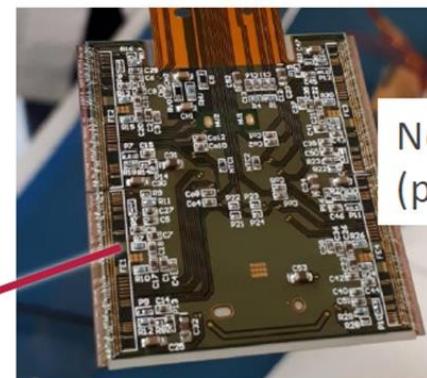
総入れ替え！
すべてシリコン検出器

パイルアップとの区別！

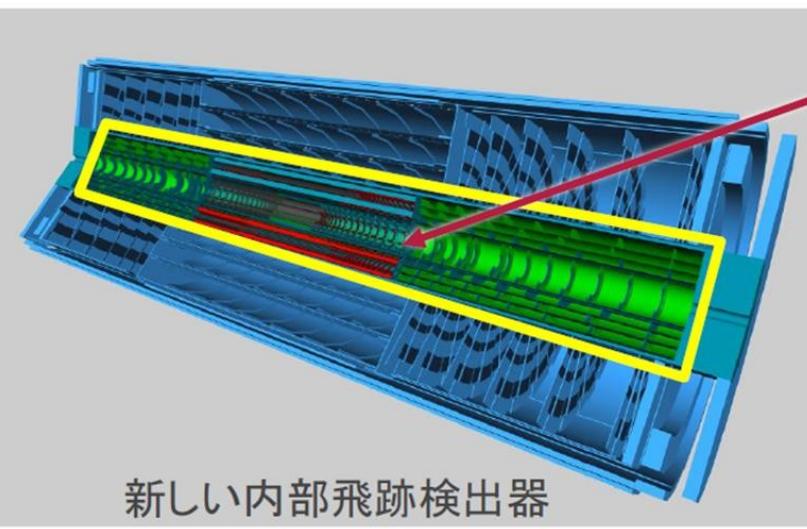


HL-LHCに向けた新しいピクセル検出器

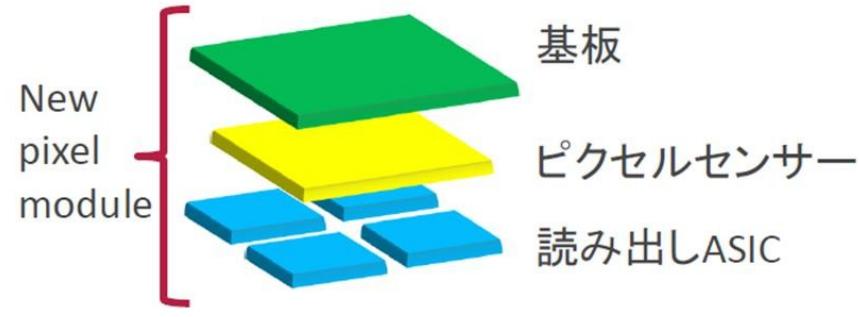
- 約8,000個のピクセルモジュールから構成



New pixel module
(prototype)



新しい内部飛跡検出器



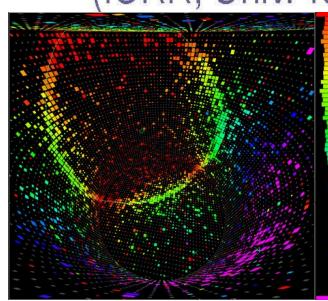
T2K実験、ハイパーカミオカンデ実験

T2K 実験: 加速器を用いたニュートリノ振動実験

- J-PARC 加速器 (茨城県東海村) を用いてミュニュートリノビームを生成
- 約 300km 地中を走り、スーパーカミオカンデ (岐阜県神岡町) で検出



Super-Kamiokande
(ICRR, Univ. Tokyo)



J-PARC Main Ring
(KEK-JAEA, T)

Year in Science Index	
Archaeology, Paleontology and Evolution	25
#8 Ancient DNA sequencing success	19
#9 Human genome reveals our lineage	45
#10 Wireless remote control for mice	47
#11 Revealing early human evolution	58
#12 Neanderthal genome revealed	52
#13 Restoring credibility after research fraud	60
#14 Human genome project reaches completion	62
#15 A surprising Neanderthal tool time	68
#16 Human genome project reaches completion	70
#17 Richard III's resting place found at last	78
#18 Human genome project reaches completion	86
#19 Revealing the role of amyloids	68
#20 Human genome project reaches completion	71
#21 Big push for brain research	72
#22 Human genome project reaches completion	73
#23 Human genome project reaches completion	89
Earth and Environment	14
#1 Carbon threshold crossed	24
#2 Greenland ice sheet confirmed	24
#3 Antarctic lake reveals secret life	24
#4 Human footprint on environment	49
#5 Found Critters never fit to science	54
#6 Human footprint on environment	54
#7 Colorado's killer floods	70
#8 Human footprint on environment	70
#9 Human footprint on environment	85
#10 Continents on a collision course	86
#11 Human footprint on environment	86
#12 Human footprint on environment	89
#13 Human footprint on environment	89
Energy	30
#14 Ruling against patenting genes	13
#15 Japan pionneers microgrid interaction	41
#16 China's first solar power plant	41
#17 Largest solar array powers up	49
#18 Chinese space station shutdown	69
#19 Chinese processed chickens thumb-up	81
Math and Physics	19
#20 A new particle cracked open	22
#21 Stunning shape simplifies quantum equations	27
#22 Human genome project reaches completion	46
#23 Human genome project reaches completion	52
#24 Flavor-changing neutrino mass problem	53
#25 Human genome project reaches completion	57
#26 Krashenbach's theory gets an assist	76
#27 Higgs boson confirmed	88
#28 Human genome project reaches completion	90
#29 Human genome project reaches completion	94
#30 Human genome project reaches completion	94
Medicine and Genetics	34
#31 Human genome project reaches completion	48
#32 Human genome project reaches completion	48
#33 Human genome project reaches completion	52
#34 Human genome project reaches completion	52
#35 Human genome project reaches completion	53
#36 Human genome project reaches completion	57
#37 Human genome project reaches completion	65
#38 Human genome project reaches completion	71
#39 Human genome project reaches completion	71
#40 Human genome project reaches completion	72
#41 Human genome project reaches completion	79
#42 Human genome project reaches completion	80
#43 Human genome project reaches completion	81
#44 Human genome project reaches completion	81
#45 Human genome project reaches completion	91
Society, Space?	23
#46 Are you afraid of holes?	23
#47 Human genome project reaches completion	45
#48 Hawk moth's eye genetics to block bat radar	55
#49 Beetles use the stars to roll their dung balls	55
#50 Beetles use the stars to roll their dung balls	55

「Discover Magazine」
の2013年トップ記事
ベスト100に

- 2010 年: 実験開始

- 2013 年: ミュニュートリノ→電子ニュートリノ出現を世界で初めて発見

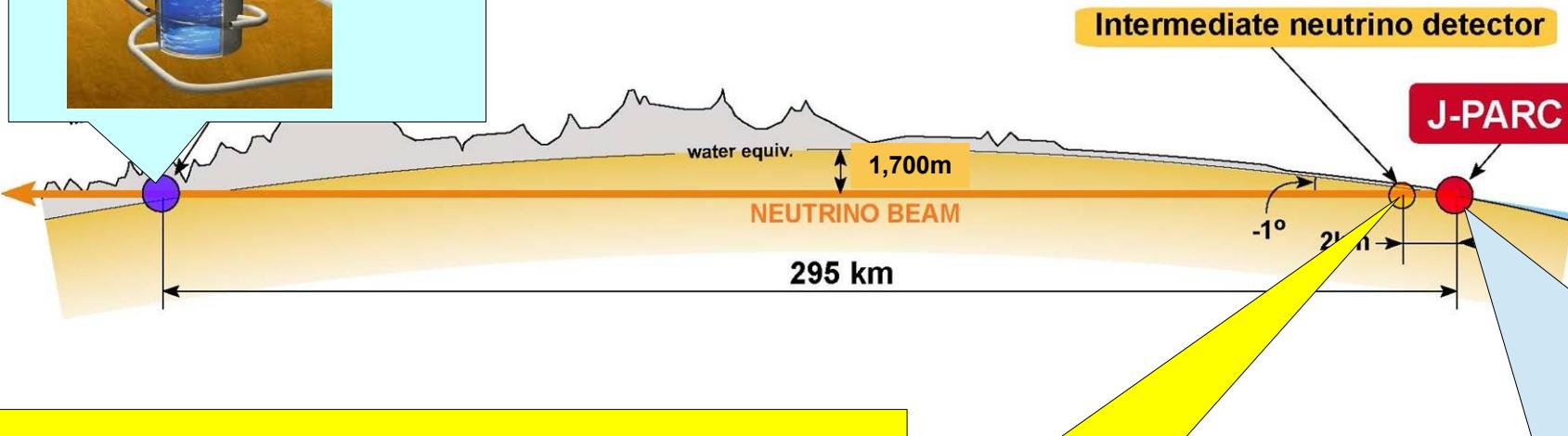
ハイパーカミオカンデ実験: スーパーカミオカンデの後継実験

→ ニュートリノの CP 対称性 (粒子・反粒子の対称性) の破れの解明、陽子崩壊の発見へ

4. ハイパーカミオカンデ 検出器の開発

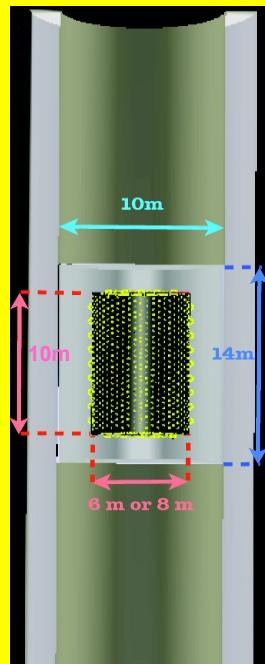


T2K&HK実験の研究内容

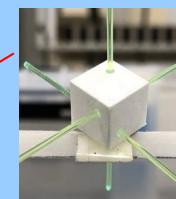
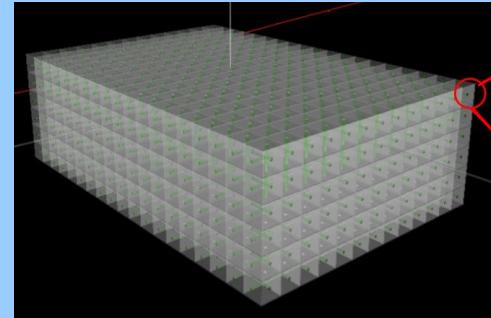


3. 新しいニュートリノ検出器の開発

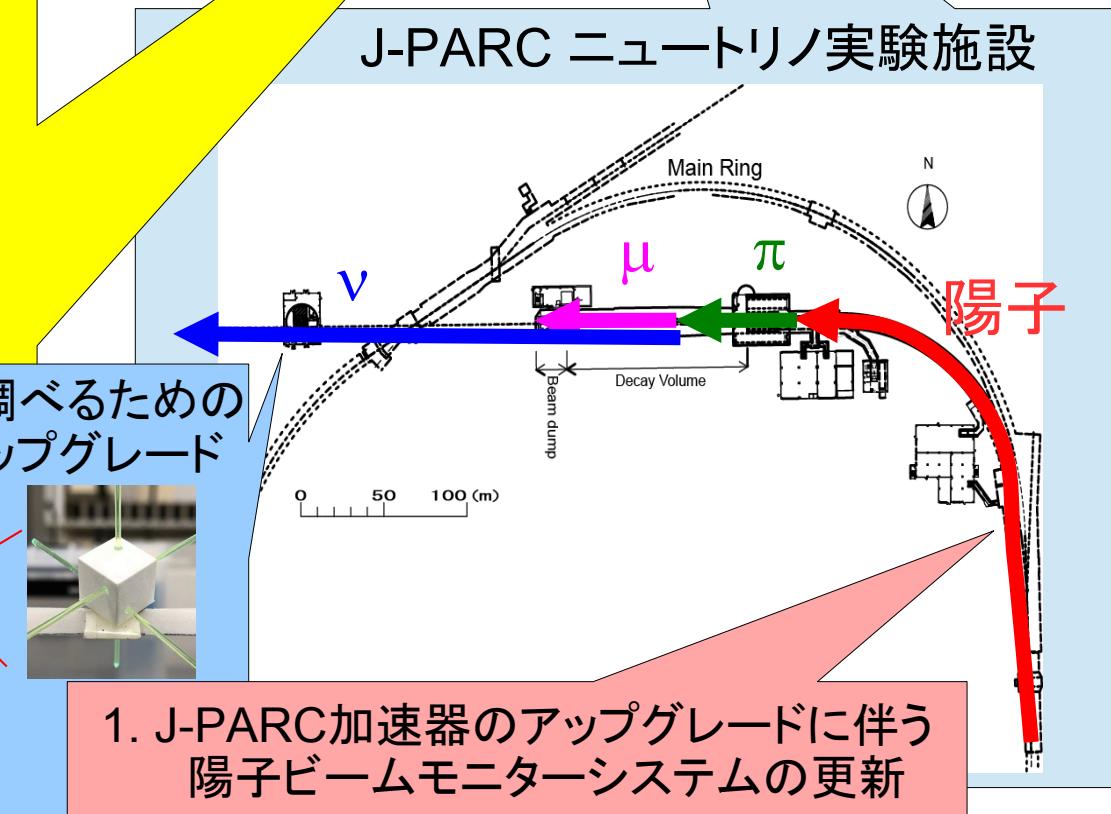
ハイパーカミオカンデ中間距離
水チェレンコフ検出器(IWCD)



2. ニュートリノ反応を詳細に調べるために 前置検出器 ND280 のアップグレード



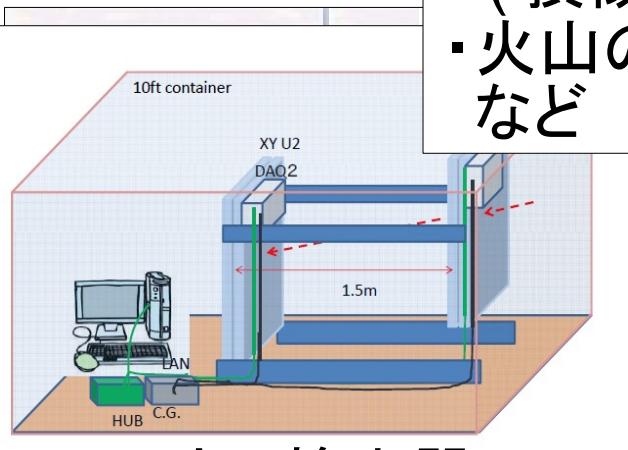
1. J-PARC加速器のアップグレードに伴う 陽子ビームモニターシステムの更新



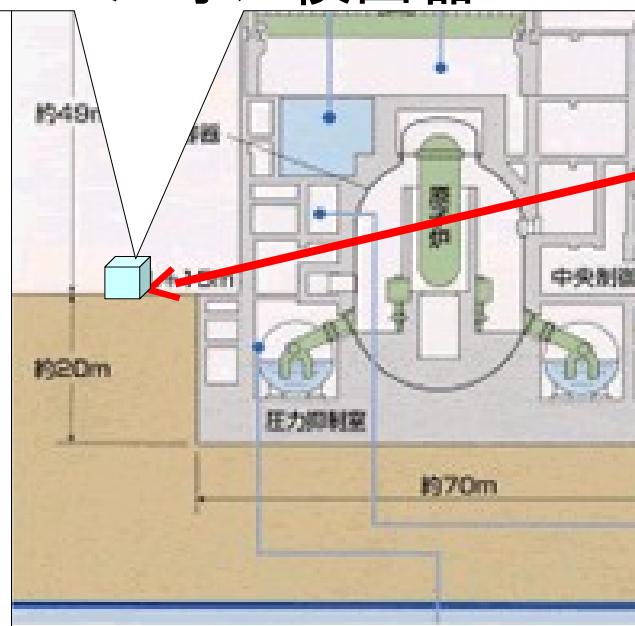
ミュオンラジオグラフィー

宇宙線ミュオンを用いた、大規模な物体の内部構造の調査

- ・(損傷した)原子炉の炉心の状態の調査
- ・火山のマグマの状態の調査など

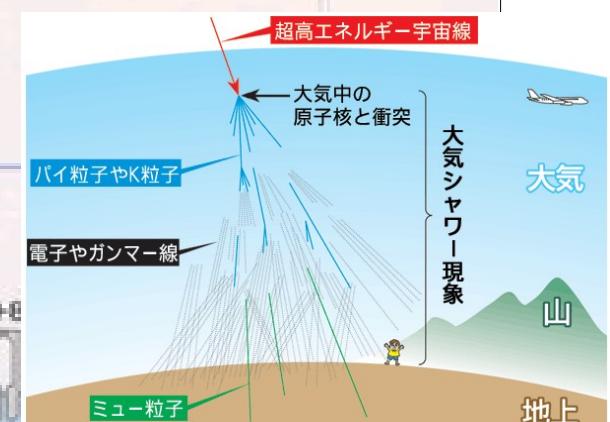


ミュオン検出器



ミュオンで見た原子炉

宇宙線ミュオン



ミュオンラジオグラフィー

宇宙線ミュオンを用いた、大規模な物体の内部構造の調査

- ・(損傷した)原子炉の炉心の状態の調査
- ・火山の内部構造の調査
- など

岩手山を透視

ミュオンで見た岩手山

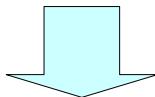
ミュオン検出器

UNI実験

ポジトロニウム生成・崩壊実験

ポジトロニウム：
電子・陽電子の束縛状態

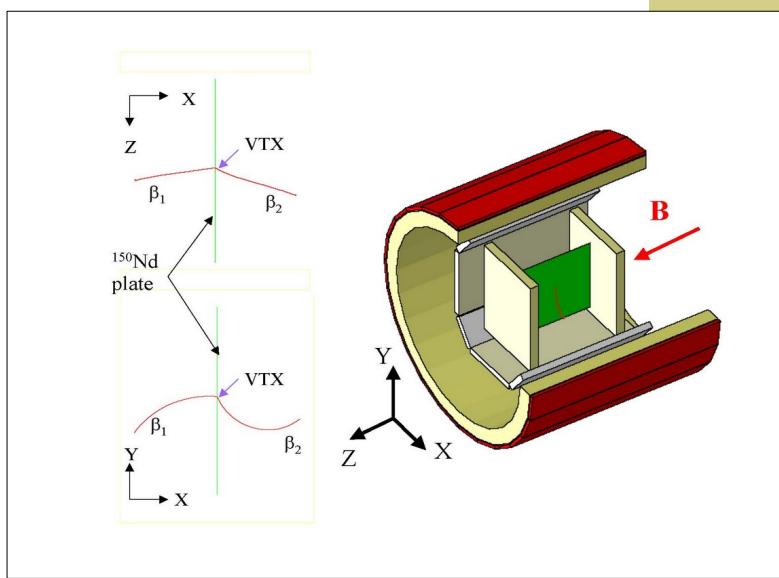
ポジトロニウムの稀崩壊
(5本の γ 線への崩壊)
の探索



QED の精密測定へ

DCBA実験

- 二重ベータ崩壊実験
 - ニュートリノを伴わない二重ベータ崩壊の探索
ニュートリノの基本的性質(マヨナラ性、質量)の解明へ
- 飛跡検出器で二本のベータ線の飛跡を検出
 - ベータ線の運動量を測定する世界で唯一の実験



現在は小規模の実験
→ 原理の実証



将来的に大規模実験へ

